

『龍舒浄土文』にみる往生人の行業

田 中 夕 子

はじめに

南宋紹興三十二年（一一六二）頃、居士の王日休により撰述された『龍舒浄土文』（以下、本書）は撰述後、日本にも早くに請来され、法然や親鸞、その門下など浄土教系の僧侶の著作に引用されたことは周知のとおりである。⁽¹⁾ 筆者はこれまでも平安時代六往生伝について考察を重ねてきた。⁽²⁾ 平安時代六往生伝を考える上で、撰述時期がほぼ同時期であり、撰述者が平安時代六往生伝と同じく在家者で知識層である本書は、看過できない書物と考える。最終的には、中国の居士や士大夫など在家の仏教者が著した書物と、日本の文人貴族が著した平安六往生伝などの書物との共通性、相違性を明らかにしていきたいと考えているが、その前に小稿では、本書のなかの行業に注目して、本書に表れた信仰、その背景となった状況について考えてみたい。

本書の行業を大別すれば、（Ⅰ）阿弥陀念仏とその勧めと

（Ⅱ）他者の教化である。（Ⅰ）阿弥陀念仏とその勧めの功德としては、（ⅰ）念仏の力は死後を救済すること、（ⅱ）それに加えて現世利益的なものであることが述べられる。

（Ⅱ）他者の教化を行う功德としては、教化者自身の利益が大きくなるためと説く。

本書では、（Ⅰ）（Ⅱ）の行業が日常生活の上で妨げとなるものでないと述べる。そして、西方を修すれば、その功德は死後だけと考えられがちであるが、現世でも多くの利益が得られるということを繰り返し説く。またその功德は自分だけではなく子孫にも利益があり、父母のために修すれば孝養にもなるという。これらは当時の儒教を素養として生きていく上でも得るものが多いことを説いているのである。『龍舒浄土文』はこのような、当時の社会通念や思想・信仰・習俗を踏まえた上で、西方往生のための行業を積極的に行えるような理論と実践の例、勧めを説いた書籍と位置づけられるのである。以下、具体的に考察していきたい。

『龍舒浄土文』にみる往生人の行業（田 中）

五六

一 『龍舒浄土文』における行業

(I) 阿弥陀念仏とその勧め

本書の行業の一つとして阿弥陀念仏とその勧めがあげられる。その功德の一つとして、(i) 念仏の力は臨終後を救済することを説明している。

第二卷（浄土総要）一では、「①至心信向念其名号者。現世必消除災難。禳却冤鬼。安靜形神。増迎福寿。②西方七宝池中則生蓮花一朵。他日於其中託生直脱輪廻之外。」と念仏すれば、①現世利益と、②往生し輪廻を脱することができるという功德を説く。

第三卷（普勸修持）六では、「是所謂十念者。乃生前自念十声念阿弥陀仏。非謂身後請人念也。生前自念者。（中略）経云。身後人為作功果七分得一。生前自作者得千百倍報。」として、念仏は自分が生前に行う方が効果が大きいと述べる。

また、第五卷「感応事跡」十六「唐房翥」伝では、房翥が頓死した時、閻羅王から「君曾勸一老人。念仏已生浄土君承此福。亦合生浄土。故召来相見。（中略）以此知。勸人修者非徒往生。又感動幽冥也。」として、人に念仏（西方を修すること）を勧める者は、幽冥の世界の者も感動させると説く。

そして (i) と同様の功德として (ii) 現世利益的なものが説かれる。小笠原宣秀氏は、『龍舒浄土文』は「浄土教の

日常性」を広く社会の人々に知らせることにより、浄土教を修持しやすくさせ、社会一般に普及することを願ったものと述べ、日常性とは世俗性、在俗的立場のものを強調して現世利益を説くことにあったことと指摘している。⁽³⁾

第一卷（浄土起信）一では、「①浄土之説多見於日用之間。而其余功乃見於身後。不知者止以為身後之事而已。殊不知其大有益於生前也。（中略）從孔子之言。而以儒教為心。豈不益於生前乎。何必浄土哉。曰。②此世間法耳。非出世間法。世間法則不出於輪廻。出世間法則直脱輪廻外。浄土既益於生前。又益於身後者。以其兼出世間法故也。」と述べて、①浄土の教えは日用の間のことを多く説いており生前の利益は大きいこと、②儒教は世間の法であるが、浄土の教えは出世間の法も兼ね輪廻を脱出できると説く。

現世利益の実例は、第八卷「現世感応」に収録される。第八卷七「閻羅王勸婆念仏」では、「閻羅王教我念仏。更無可疑。故常念此仏名。近百二十歳方終。其生浄土必可必矣。豈非以其念仏而又延寿乎。何其寿之多也。」として、念仏の功德により生前は延寿し、死後は往生できると説く。

また、病氣平癒は、第八卷六「阮嫂念仏眼明」、同卷十二「念仏店疾遂愈」、同卷十三「念仏痼疾皆愈」等にある。その他、災難から逃れることが第八卷十一「念仏屋不壓死」、悪夢を避けることが第八卷三「鄒賓王念仏夢覺」、同卷五「劉

慧仲念仏安寝」、同卷十「夢中念仏脱恐懼」、同卷四「張繼祖念仏薦亡」等に収められている。

他、念仏を行い、念仏を勧めた伝は、第五卷「感応事跡」一慧遠（百二十三人と蓮社を組織）、二十六黄打鍔（頌を印刷して広く配布し、念仏を勧めた）、二十七呉瓊（料理人、動物の肉を切るたびに念仏、村中に経を念じて懺を修し、阿弥陀念仏を勧めた）等がある。また、他者から念仏を勧められ念仏して往生した挿話が、第五卷十八姚婆（知人に勧められる）、二十一張善和（牛を屠す、僧侶により臨終時に阿弥陀念仏を勧められる）等数多く収められる。これらは市井の人々であったり、生活のために殺生を行う者であったりするが、自ら念仏しても、他者から念仏を勧められて念仏しても往生できる例をあげている。

ところで、第八卷七「閻羅王勸婆念仏」では、頓死した蔣婆は陰府へ行き、閻羅王から経を念じられるかと問われ、出来ないと答えると「但念阿弥陀仏」と教えられた。このように本書では、往生のためには大乘經典を誦誦、念じることをまず勧めるが、できない者へは念仏を勧める。念仏は文字を読めない者から読める者まで幅広い階層ができる行業として最も勧められているのである。

その他、本書に説かれた往生の行業は、觀念（第二卷七）、齋戒をたもつ（第四卷八）、善業を迴向（第四卷十三）、三福を

修す（同卷十四）、大悲陀羅尼十万遍（第五卷四「張抗」、法華經誦誦、書写（同卷六「慧進」、阿弥陀像造像（同卷八「道諭」、觀音・勢至二菩薩造像（同卷十四「惟岸」、阿弥陀經十万余卷書写、浄土變相図三百余卷造像、塔修善（同卷九「善導」、金剛經十万遍誦誦（同卷十五「尼浄真」、金剛經万遍誦誦、五台山巡礼（同卷十六「房翥」）等がある。しかし、念仏ほど繰り返し返し説かれていない。

（Ⅱ）他者の教化を勧める

本書を代表するもう一つの行業は、他者への教化を勧めることである。

第二卷（浄土総要）五では、「仏能度一切衆生。不能度一切不信之人。以不信比命尽者可謂極矣。蓋信者一念也。」として、そもそも不信の者は救われまいとする。

そして、第三卷（普勸修持）七では、「①若止於自修。則是声聞之徒。名為小乘。蓋如車乘之小者。僅得自濟已。而此仏所謂斷仏種也。能広勸人者。名為大乘菩薩。蓋如車乘之大者。人我兼濟之。謂此獲無量福報。所以能至仏地也。（中略）②故能勸一人修浄土。以此善縁消積罪惡可也。増崇福壽可也。莊嚴往生功德可也。（中略）③勸人善道。名為法施。此浄土法門為法施之大者。遂超出輪廻。非其他法施之比。故其福報不可窮尽。故大慈菩薩勸修西方偈云。能勸二人修。比自已精進勸至十余人。福德已無量。如勸百与千。名為真菩薩。

又能過万数。即是阿弥陀。」として、①浄土の教えを人に勧める人は大乘の菩薩であり、無量の福報を獲ること、②浄土を修することを勧めれば善縁により罪惡が消え、福寿が増すこと、③西方の教えを人々に教え勧めることは法施であり、輪廻を超出でき、その福報は尽きることがないと説き、多くの人を勧化するのは菩薩、如来であると説く。

その他、第六卷「特為勸諭」では三十七種の身分、職業、状況等をあげ、それに応じて念仏や西方の行業の勧め等を説いている。⁽⁴⁾

二 行業の背景

以上、本書における代表的な二つの行業を確認した。つぎに、これら行業を行うことを勧める上で、背景にあった思想・信仰・習俗を見ていく。⁽⁵⁾

・ 儒教

第一卷（浄土起信）四では、「①儒釈未嘗不同也。其不同者。唯儒家止於世間法。釈氏又有出世間法。儒家止於世間法。故独言一世而帰之於天。釈氏又有出世間法。故知累世而見衆生業縁之本末。此其所不同耳。（中略）②所謂出世間法浄土尤有要者。不可以不勉也。」と述べ、①儒教は世間の法に止まるが、②仏教は出世間の法であり、その中でも浄土の教えがもつとも重要であると説く。

また、儒教において重要なキーワードである「孝養」については、第六卷（特為勸諭）九「勸孝子」に「蓋世間之孝一世而止。猶為孝之小者。出世間之孝無時而尽。以父母生浄土。福寿不止如恒河沙劫。此莫大孝也。（中略）上品上生者先言孝養父母。」として、世間の孝は一世止まりだが、仏の教えにより父母を浄土往生させることは莫大な孝養であることを説く。また、孝養については第四卷（修持法門）十三等各所で言及している。

その他、第九卷「助修上品」では儒教との近似性や相違性を指摘しながら浄土の教えの優位性を説く例が数多くあげられる。このように本書全体に渡って儒教を意識して西方の教えの長所を説き、西方を修することを勧めているのである。

・ 前世・来世・因果応報

本書では折に触れて、今生の境遇は前世に修めた行業によるものであり、今生の生き方によって来世の境遇が変化すると説き、浄土を修めること勧める。このように本書では前世・来世の存在が前提としてあり、因果応報することと考えられている。

第六卷二「勸有官君子」では、「有官君子無非前世修種作福故受此報。（中略）若更修福。行種種方便愛人利物之事。以此廻向西方。則直出輪廻之外。寿樂無窮。」と述べ、現世の地位の高さは前世の福によるものであり、さらに浄土を修

すれば輪廻を脱出できると説く。一方、第六卷十六「勸工匠」では、「為工匠者当自念。云。我為工匠。或為人造屋宇。或為人作器用。此雖為善業。然以前世不曾修種故。今生自不富足。」として、前世、浄土の行業を修めなかったので富が不足して人のために働く身職に生まれたと説明する。

・日常生活の重視

本書では一貫して、西方を修することは日常生活に支障をきたさないと示している。

第一卷（浄土起信）二では、「所以修者不難。亦不妨一切俗事。故在官不妨職業。在士不妨修読。在商賈不妨販賣。在農人不妨耕種。在公門不妨事上。在僧徒不妨參禪。凡一切所為皆不相妨。」と、どんな職業であつても西方を修することは妨げとならないと説く。

加えて、第四卷「修持法門」十三では、「①若為子而孝養父母。為兄而友愛昆弟。為弟而欽順其兄。閨門之内無不尽善。宗族之間無不和睦。郷党隣里姻親相接以礼。相与以恩。以至事君則赤心為国。為官則仁慈利民。為長善以安衆。為下則勤以事上。或教導愚迷。或扶助孤弱。或濟急難。或惠貧窮。或修橋砌井。或施藥散食。或減己奉養以利他人。或臨財饒人以自省約。或人以善。或讚善止惡。②随力随所作世間一切善。以此回向願生西方亦可。」と述べ、西方を修することは、①父母・兄弟等家族や一族、近隣の者、君臣の間など、

家族生活、社会生活を送る中でできる利他行をはじめとする善行などを、②各自の状況に従つてできる限り行い、それを回向して往生を願えと説く。

おわりに

以上のように『龍舒浄土文』は、浄土の行業を修めることは、日常生活において無理なく行えることであり、それは儒教を生活の基本とし、道教を信仰するなかでも行え、孝養・家の繁栄など儒教的な利益も、寿命が延びる等の道教的な利益も蒙ることを説く。

つまり本書は、当時の在俗の思想・信仰・習俗の中でいかに浄土教を普及させるかを考え、浄土の行業の功德と行業を修するための実践的な行動を述べているのである。

当時、中国や日本で数多く編纂された往生伝の撰述者はその序において、往生伝は読むことで読者に発心をさせ、往生人と結縁して往生することを目的としていることを述べており、撰述の意図としては受動的な書物であった。それに対して本書は積極的に浄土を修し、人を教化し、その輪を広げていくという社会運動的な側面をもつ、能動的な浄土教の書籍と位置づけられる。これは編者・王日休が考える菩薩道の実践の一つの表れと考える。

『龍舒浄土文』にみる往生人の行業（田 中）

六〇

1 先行研究において本書は中国居士仏教を考察するなかで多々

触れられてきたが、本書そのものを主題とする研究は多くない。本書を主題とした先行研究には、小笠原宣秀『中国近世浄土教史の研究』（百華苑、一九六三年）、同「宋代の居士王日休と浄土教」（『結城教授頌寿記念仏教思想史論集』、大蔵出版、一九六四年）、林田康順「王日休『龍舒浄土文』の研究」（二）——王日休の生涯考——（『印度学仏教学研究』四一巻一号、一九九二年）、同「王日休『龍舒浄土文』の研究」（二）——その撰述年次と増広考——（『宗教研究』二九五号、一九九三年）、同「王日休『龍舒浄土文』の影響」（二）——巻第六「特為勸諭篇」を中心として——（『仏教論叢』三七号、一九九三年）、同「王日休『龍舒浄土文』の研究」（五）——人間観——（『仏教論叢』三八号、一九九四年）、原田哲了「いわゆる『龍舒浄土文』の研究」（『印度学仏教学研究』五一巻一号、二〇〇二年）がある。浄土宗祖師等の著述に表れた本書については、林田康順「王日休『龍舒浄土文』の影響——聖聡上人『当麻曼陀羅疏』を中心として——」（『仏教論叢』三六号、一九九二年）、同「王日休『龍舒浄土文』の影響」（三）——浄土宗祖師の引用四類型概観——（『大正大学大学院研究論集』一七号、一九九三年）、同「王日休『龍舒浄土文』の研究」（三）——巻第六「特為勸諭篇」の思想について——（『印度学仏教学研究』四二巻一号、一九九三年）等がある。

2 拙稿「往生人と阿弥陀像」（『日本宗教文化史研究』一〇巻二号、二〇〇六年）、同「往生人と行業に関する一考察——仏像に関する行業を中心に——」（『日本宗教文化史研究』一二巻一号、二〇〇八年）、「往生伝にみる親と子」（『印度学仏教学研究』六〇巻二号、二〇一二年）等。なお、本書のテキストは『大正

蔵』四七巻No.1970を使用した。

3 前掲註（1）小笠原氏「宋代の居士王日休と浄土教」参照。

4 「特為勸諭」については、前掲註（1）林田「王日休『龍舒浄土文』の研究」（三）——巻第六「特為勸諭篇」の思想について——、同「王日休『龍舒浄土文』の影響」（二）——巻第六「特為勸諭篇」を中心として——で考察がなされている。

5 唐・宋代の士大夫の仏教受容の状況や背景については、中嶋隆藏「士大夫の仏教受容」、唐代の民衆の思想、信仰、文化については、齊藤隆信・西本照真「民衆仏教の系譜」（いずれも『新アジア仏教史七 中国Ⅱ隋唐 興隆・発展する仏教』、佼成出版社、二〇一〇年）、前掲註（1）小笠原氏「中国近世浄土教史の研究」、宋代の思想については、土田健次郎「宋代の思想と文化」（『新アジア仏教史八 中国Ⅲ宋元明清 中国文化としての仏教』）等参照。

〈キーワード〉 儒教、居士仏教、往生伝

（佛教大学総合研究所特別研究員）